

読み返す価値に気付こう

1か月間に1冊も本を読まない児童・生徒の割合を示す「不読率」が令和に入り、増加傾向にあることが東京都内の小中高校生を対象にした都教育委員会の調査で明らかになったというニュースを目にした。この現象を深刻に捉えている人はどれくらいいるのだろうか。

読書と一言でいってもその方法はさまざまである。気になる本をとにかく片っ端から読み、視野を広げる方法がある。一方で、読書とは自分の支えとなる厳選した本を何度も読み返すからこそ意味があると主張する人もいる。これまでどちらかといえば前者の傾向にあった私は最近、後者に憧れるようになり、読み返すということに挑戦している最中だ。

エビングハウスの忘却曲線というものがある。一度は耳にしたことがあるかもしれないが、これは、ドイツの心理学者ヘルマン＝エビングハウスが提唱した理論で、何かを学習後、20分経過すれば42%は忘れてしまうなどと言われている。そして復習しなかった場合は1か月もすればほとんどを忘れてしまうという。

これは読書にもあてはまる。これは学びが多いと思った本をたくさん読んだとしても、それを実践したり、何かに書き留めたり、読み返したりしなければ、学びは一時的なものになってしまう。現に私も、書齋には200冊を超える本があるものの、その内容を記憶している本の数を聞かれると絶句してしまう。

そこで、読み返すということに目を向けてみることにした。選んだ一冊は『神様のカルテ(夏川草介/小学館文庫)』である。映画化もされたこの物語の舞台は、本庄病院という「24時間365日対応」を掲げる病院だ。主人公の栗原一止は、この病院で働く内科医で、連日連夜不眠不休の診療を続ける。

4月、東京の大病院から新任の医師として進藤辰也がやってくる。一止と進藤はかつて信濃大学の同級生だった。だが、着任後の進藤に、病院内では信じがたいほどの悪評が立つ。失意する一止にさらなる試練が襲う。それは、同じ病院で勤務する古狐先生こと内藤鴨一先生が突然発病し、倒れてしまう。病名は「悪性リンパ腫の中樞神経浸潤」であり、1か月ももたない厳しい状況だと判明した。

古狐先生には千代という妻がいる。その妻との馴れ初めの場所が、北アルプスの名峰の一つ常念岳のてっぺんであり、そこで見た星空のもと、告白したという。命が限られた古狐先生は最後に妻と二人で常念に登りたいと言う。

しかし、病院はおろか病室を出るのも憚られる状況であったため、栗原が周囲を巻き込んで計画したのが、病院屋上のヘリポートから星空を眺めるということだった。それもただ星空を見るだけでなく、周囲に根回しして、1分間だけ、病院内の電気をすべて消すという演出をした。日付が変わり、松本市内を照らす光が消えた中、24時間365日対応という看板の光まで落としたのである。これにより、古狐先生は最期に、常念岳のてっぺんを思わせる満天の星空を妻と二人で眺めることができた。

しかし、翌日の朝、栗原たちは院長先生と事務長に呼び出されることになる。そこでのやりとりが強く印象的だった。事務長は、医師の務めは患者を治療することであるため、それ以外の行動は慎むように栗原らに言った。最初は黙秘を貫いていたが、耐えかねて進藤辰也が言う。「たとえ病が治らなくとも、我々にはできることがあるのだとは考えないのですか。」この言葉を受け入れない事務長に対して、ついに栗原が口を開く。「治らない患者と相対するのが医者領分でないとおっしゃるなら、彼らは一体どこへ行けばよいのかと聞いているのです。」そして、「あなたは医師でしょう。もう少し医師として……。」と言った事務長に対して栗原は「医師の話ではない。人間の話をしているのだ!」と一喝した。その後の栗原の言葉である。

「我々は人間です。その人間が死んでいくのが病院という場所です。いやしくも一個の人間が生死について語ろうとするならば、手帳も算盤も肩書も投げ捨てて、身一つで言葉を発するべきではありませんか」

「かかる態度をくだらない理想論と笑うならば結構、好きなだけお笑いなさい。しかし、あえてこのバカバカしい理想論を押し立て、かつ押し進めていかなければ、一体誰がこの救い難い環境の中で、正気を保って働き続けられるというのですか」

「満床のベッド、過酷な労働環境と医師不足。そんなわかりきったことは、わざわざ手帳に書き留めるまでもないことです。はるかに大切なことは、かかる逼迫した環境でさえ、なお為し得ることがあるという確信を捨てないことではありませんか」

本庄病院が掲げる「24時間、365日対応」を支えているのは「この町に、誰もがいつでも診てもらえる病院を」という古狐先生とその仲間の確信だったのである。

これはなにも、小説の世界、医療の世界だけの話ではない。常に人と相対する教育や家庭、各業界など、度の世界でもいえることではないか。理想を語ると冷ややかな目で見られるようになってしまった。自分の信念を貫こうとする姿が非常識だと揶揄されることさえある。だからどうした。いつの時代も、新たな価値を生み出すのは非常識である。無理やり常識に押し込める必要など微塵もない。非常識大歓迎である。このような時代だからこそ、大いに理想を語って生きていきたいと思わせてくれる一冊であった。読み返す価値、恐るべし。